

大学運動部活動における部員の適応感について — 関東・東海地区女子球技チームの傾向 —

青竹 悠里 山下 純平
愛知教育大学大学院 愛知教育大学

About adjustment of the university athletic club — Tendency of the women's ball game team of kanto and tokai area —

Yuri AOTAKE Junpei YAMASHITA
Aichi University of Education

キーワード：大学スポーツ，大学運動部活動，適応感，女子

Key Words：university sport, university athletic club, adjustment, woman

1. はじめに

スポーツは手段的な効用を超えて、スポーツ体験そのものに価値を持つとする自己目的的な活動であり、自らの意志で自由に行うことが望ましいとされている¹⁾。また、スポーツ基本法では、「スポーツは、世界共通の人類の文化であるとし、心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自律心その他の精神の涵(かん)養等のために個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動であり、今日、国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠のもの」と定めている²⁾。そして我が国において、スポーツは主に大規模で成立している運動部活動で行われ発展していると言える³⁾。しかし、運動部活動におけるハラスメント、体罰の問題など昨今の社会的問題になったように、スポーツを行うことで精神的な健康を損なう場合もある。これらのことにより様々な場所で部活動の在り方について議論された^{4) 5)}。

運動部活動において部員の部活動に対する適応感(注)は大切であると考えられる。先行研究によると、適応感が低いことは、神経症に陥ってしまったり、バーンアウトを起こしてしまったり、退部したりしてしまう事例が報告されている⁶⁾。

一方、適応感をもって部活動に参加することは、学校生活での適応感も高まる⁷⁾、スポーツ観の形成⁸⁾など、部活動以外での生活において様々な良い効果が得られることが明らかになっている。しかしながら運動部活動の適応感の研究は中学・高校運動部活動対象が多く、大学運動部活動の研究は少ない。その中でも、桂・中込は、大学運動部活動の適応感について、他者との関係など外的な要因が適応感に最も影響することを個人単位で分析し明らかにしている⁹⁾。しかしながら、大学運動部活動は以下に述べるように特殊であり、集団単位で分析し、傾向を調べる必要があると考える。

大学スポーツに関して文部科学省は、次のように述べている。第2期スポーツ基本計画において大学スポーツの振興について施策目標として、「我が国の大学が持つスポーツの資源を人材輩出、経済活性化、地域貢献等に十分活用するとともに、大学スポーツ振興に向けた国内体制の構築を目指す。」と挙げている¹⁰⁾。また、スポーツ基本法では、大学等によるスポーツへの支援について「国は、スポーツの普及又は競技水準の向上を図る上で企業のスポーツチーム等が果たす役割の重要性に鑑み、企業、大学等によるスポーツへの支援に必要な施策を講ずるものとする(28条).」と述べて

いる²⁾。これらのことを踏まえ、現状として大学スポーツは、指導者やボランティアの育成、アスリートのキャリア形成支援など、質の高いスポーツ人材の育成に重要な役割を担っているとしている¹¹⁾。そしてこのような方針のもと、多くの大学は共通して「大学運動部活動は学生の自主的な活動である」と定めている。しかしながら大学によって、大学と運動部活動の関わり方が違う部分がある。大学が積極的に関わり、スポーツ又は運動部活動とは何か規定し、強化・振興している場合、大学が関わらず学生のみ、学生主体で行っている場合の大きく2つに分かれる^{11) 12) 13) 14) 15)}。大学スポーツの振興を定めているのに対し、現状は大学によってスポーツの振興に差がある。このような違いが生じるのは、第2期スポーツ基本計画や、大学スポーツ振興に関する検討会議で現状として述べられているように、大学のスポーツの振興に係る体制が不十分であるからである^{11) 12)}。さらに、大学スポーツを一括にまとめる組織はなく、競技ごとに学生連盟中心として試合やリーグを運営し行われているからである¹⁰⁾。これは中学・高校運動部活動と大きく違う点である。中学・高校運動部活動は、日本中学校体育連盟・全国高等学校体育連盟によって統括している。しかし大学運動部は大学や競技運営によって違いがあり、中学・高校運動部活動に比べても特殊であると言える。

以上のことから大学運動部活動は競技力向上・スポーツの振興を担っているが、サポート体制が不十分であり大学ごとに差がある。また競技ごとにも差があると考えられる。また中学・高校運動部活動と違いがある点から、さらに大学運動部活動の適応感について研究する必要がある。

そこで本研究では、大学運動部活動における適応感をチームごとに分析することで、大学運動部活動の適応感の傾向を分析し、実態を明らかにすることを目的とする。なお、本研究において大学運動部活動を、「大学公認の体育会」に所属し、学生連盟が運営している大会・リーグ戦に出場している団体とする。

II. 方法

1. 調査対象・方法

調査対象は関東・東海地区の大学女子運動部活動球技種目(ラクロス、バスケットボール、サッカー、ハンドボール、バレーボール)の19チームである。また本研究で扱う適応感の調査アンケートに主将に対する気持ちを尋ねる項目があるため主将を除く。選手のみ(マネージャーやトレーナーを除くプレイヤー)の349名を対象とした。

平成30年10月上旬から10月中旬に各チームの主将にアンケートの旨を伝え、チームごとにアンケートを実施してもらい、後日回収した。

2. 調査内容(質問紙)

(1) フェイス項目

チームと選手個人のフェイス項目を尋ねた。チームについて主将に、大学名、所属する部活動名、マネージャーやトレーナーを除く部員数、学年、主将の期間、自分が主将時の競技成績、今行っている競技の競技歴を尋ねた。競技成績は各地区リーグレベル(関東リーグ参加、東海リーグ参加)を低、各地区大会レベルより上(東・西日本インカレ以上)を高とした。選手個人に学年、今行っている競技の競技歴を尋ねた。また回収率は各チームすべて60%以上のものを分析対象とし、有効なアンケート302名の分析を行った。選手個人に対して、大学名、所属する部活動名、学年、今行っている競技の競技歴について尋ねた。

(2) 部活動への適応感

吉村^{16) 17) 18)}を参考にアンケートを作成し、適応感について20項目を尋ね、6段階(1:全然あてはまらない 2:あてはまらない 3:あまりあてはまらない 4:ややあてはまる 5:あてはまる 6:大変よくあてはまる)評定で回答を求めた(図1)。

3. 分析方法

本研究の統計解析にはIBM SPSS Statisticsを使用した。

部員数、競技成績が適応感に影響しているのかがどうか明らかにするためにピアソンの積率相関分析を用いて分析を行った。また、統計的有意水準は5%未満とした。

チーム間の適応感得点平均の差を明らかにする

2. あなたの部活動に対する**気持ち**についてのアンケート
 あてはまるものに1つ丸を付けてください。
 なお、今回得た情報は研究目的以外では使用しません。

「全然あてはまらない…1」「あてはまらない…2」「あまりあてはまらない…3」「ややあてはまる…4」「あてはまる…5」「たいへんよくあてはまる…6」

	全然あてはまらない	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	たいへんよくあてはまる
1. 辛い練習でも自分のために役立つと立ち上がれば積極的に練習している。	1	2	3	4	5	6
2. 部員のだれよりも上手になろうと真剣に努力している。	1	2	3	4	5	6
3. 放課後の練習以外にも自分のできる目標を立てて練習している。	1	2	3	4	5	6
4. 試合に出場し活躍したいから一生懸命練習している。	1	2	3	4	5	6
5. 部活に関連したスポーツや催し物のテレビ番組を進んで見る。	1	2	3	4	5	6
6. 他人の上手なプレーやフォームはよく注意し自分でもまねをしてみる。	1	2	3	4	5	6
7. 部活に関する新しい知識や技術が得られる本・雑誌をよく読む。	1	2	3	4	5	6
8. 部活は自分の生活にとってなくてはならないものだ。	1	2	3	4	5	6
9. 部活動には積極的に参加している。	1	2	3	4	5	6
10. 部活は楽しい。	1	2	3	4	5	6
11. 主将のもとで練習できることは嬉しい。	1	2	3	4	5	6
12. 主将の指導に従えば自分も上手になると思う。	1	2	3	4	5	6
13. 主将を目標に練習したいと思う。	1	2	3	4	5	6
14. 主将の行動や意見はいつも正しいと思う。	1	2	3	4	5	6
15. 他人の人に主将を代わってほしくない。	1	2	3	4	5	6
16. 部員みんなと一緒にいると楽しい。	1	2	3	4	5	6
17. 自分の部はみんな仲がよくて明るい。	1	2	3	4	5	6
18. 部活では部員みんなを信頼している。	1	2	3	4	5	6
19. 部活に來ても居心地はよくない。	1	2	3	4	5	6
20. 自分の部はまとまりがない。	1	2	3	4	5	6

図1 適応感についてのアンケート

ために、分散分析を行い、有意差が見られるものに対し多重比較を行った。また、統計的有意水準は5%未満とした。

Ⅲ. 結果

1. 相関

部員数、競技成績、適応感の関係を見るために、それぞれに相関分析を行った。その結果、部員数・競技成績 ($r=.178, p>.05$)、部員数・適応感 ($r=-.004, p>.05$)、競技成績・適応感 ($r=-.027, p>.05$)であった。

2. 部活動への適応感尺度の分析

部活動への適応感(以下適応感)のアンケート20項目について因子分析を行った。逆転項目については、点数を逆転した。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から3因子解を採用し、最尤法・

プロマックス回転を行った。回転後の因子負荷量がいずれか一方の因子に対して.40以上を示した項目を採用した。その結果1項目(「部活は楽しい」)が除外され、19項目となり、再度最尤法・プロマックス回転を行った。これは吉村¹⁶⁾17)と同様3つの尺度に分類され、尺度を構成する項目が同じであった(表2)。そこで本研究においても吉村と同様、第1因子を「部活動に対する積極的行動」、第2因子「主将のリーダーシップへの満足」、第3因子「部の雰囲気への満足」とした。

3. 各因子尺度の信頼性

各因子尺度の信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出した。「部活動に対する積極的行動」が.875、「主将のリーダーシップへの満足」が.879、「部の雰囲気への満足」が.837であった。

4. チームごとの得点平均及び因子内項目の得点平均

すべてのチームの「適応感全体」、「部活動に対する積極的行動」、「主将のリーダーシップに対する満足」、「部の雰囲気への満足」の得点平均と標準偏差を出した(表3)。

5. チーム間の得点平均及び因子内項目の得点平均の比較

本研究は大学運動部活動の適応感の傾向を明らかにするために、「適応感全体」、適応感因子である「部活動に対する積極的行動」、「主将のリーダーシップに対する満足」、「部の雰囲気への満足」の

表2 適応感尺度の分析

質問項目	因子		
	I	II	III
辛い練習でも自分のために役立ちそうであれば積極的に練習している。	.706	.086	-.012
部員のだれよりも上手になろうと真剣に努力している。	.871	-.061	.014
放課後の練習以外にも自分のできる目標を立てて練習している。	.720	.011	-.107
試合に出場し活躍したいから一生懸命練習している。	.757	-.128	.143
部活に関連したスポーツや催し物のテレビ番組を進んで見る。	.562	.121	-.106
他の人の上手なプレーやフォームはよく注意し自分でもまねをしてみる。	.624	-.047	.015
部活に関する新しい知識や技術が得られる本・雑誌をよく読む。	.569	.119	-.196
部活は自分の生活にとってなくてはならないものだ。	.492	.051	.191
部活動には積極的に参加している。	.594	-.028	.183
主将のもとで練習できることは嬉しい。	.044	.665	.218
主将の指導に従えば自分も上手になると思う。	.023	.871	-.028
主将を目標に練習したいと思う。	-.047	.962	-.054
主将の行動や意見はいつも正しいと思う。	.049	.838	-.104
他の人に主将を代わってほしくない。	.029	.487	.152
部員みんなと一緒にいると楽しい。	-.080	.010	.862
自分の部はみんな仲がよくて明るい。	.004	-.058	.898
部活では部員みんなを信頼している。	-.062	.094	.821
部活に来て居心地はよくない。(逆転)	-.039	-.018	.545
自分の部はまとまりがない。(逆転)	.113	.053	.501
因子間相関	II .475		
	III .557	.517	

表3 チームごとのフェイス項目と適応感、因子内項目の得点平均

チーム	部員数	競技成績	適応感合計平均	積極的	主将	雰囲気
A	20	高	81.3(14.8)	37.0(8.2)	20.4(4.4)	23.8(4.0)
B	15	高	95.4(8.2)	41.3(5.7)	26.0(3.3)	28.1(2.7)
C	40	低	79.3(11.8)	34.5(6.7)	21.9(4.9)	22.9(3.9)
D	12	低	94.3(7.4)	42.0(4.7)	25.4(3.3)	27.0(3.5)
E	8	低	85.5(7.5)	41.8(4.0)	19.4(3.9)	24.4(3.8)
F	36	低	90.1(12.2)	40.0(6.9)	23.5(4.4)	26.6(3.2)
G	16	低	85.0(14.6)	42.2(5.3)	20.8(6.4)	22.7(5.0)
H	9	低	77.2(7.4)	34.9(5.4)	18.4(2.5)	23.9(2.9)
I	29	高	93.9(11.9)	42.1(6.9)	25.2(4.1)	26.6(3.3)
J	12	高	71.8(10.9)	35.5(5.6)	19.6(4.1)	16.7(2.9)
K	36	高	92.3(12.5)	41.1(6.8)	25.6(4.6)	25.7(3.8)
L	9	低	89.2(8.4)	39.0(4.1)	23.9(4.2)	26.3(2.9)
M	14	低	78.2(13.6)	37.9(8.2)	20.4(4.7)	20.0(2.7)
N	15	低	84.3(11.3)	36.7(8.0)	23.8(2.6)	23.7(4.1)
O	8	低	98.1(9.6)	42.9(4.6)	28.0(2.3)	27.3(3.0)
P	12	低	89.9(12.4)	41.8(8.0)	24.7(3.1)	23.5(5.7)
Q	14	低	92.9(11.6)	41.6(7.1)	25.7(4.3)	25.6(3.7)
R	7	低	92.6(12.9)	45.3(8.3)	20.6(4.9)	26.7(2.1)
S	11	低	86.1(13.6)	40.9(5.8)	21.2(6.8)	24.0(4.4)
合計	323	-	87.2(11.2)	39.5(7.1)	23.2(4.9)	24.6(4.4)

括弧の中の数字はSD

それぞれに対してチームごとの得点平均の差を分析した。

(1) 適応感全体

適応感を19チームそれぞれ比較するため、分散分析を行った。それぞれのチームを独立変数、「適応感」を従属変数として、分散分析を行った。その結果有意差が見られた ($F(18,304) = 5.603, p < .001$)。その後 Tukey HSD を用いて多重比較を行った。その結果 A チームと I チーム, B チームと C, H, J, M チーム, C チームと D, F, I, K, O, Q チーム, D チームと J チーム, F チームと J チーム, H チームと I, O チーム, I チームと J, M チーム, J チームと K, O, P, Q, R チーム, K チームと M チーム, M チームと O チーム間に差が見られた (表4)。

(2) 「部活動に対する積極的行動」について

適応感下位尺度の「部活動に対する積極的行動」について、19チームそれぞれ比較をするため、分散分析を行った。それぞれのチームを独立変数、「部活動に対する積極的行動」を従属変数として、分散分析を行った。その結果有意差が見られた ($F(18,304) = 3.346, p < .001$)。その後 Tukey HSD を用いて多重比較を行った。その結果 C チームと G, I, K, R チームの間に差が見られた (表5)。

(3) 「主将のリーダーシップへの満足」

適応感下位尺度の「主将のリーダーシップへの満足」について、19チームそれぞれ比較をするため、分散分析を行った。それぞれのチームを独立変数、「主将のリーダーシップに対する満足」を従属変数として、分散分析を行った。その結果有意差が見られた ($F(18,304) = 5.163, p < .001$)。その後 Tukey HSD を用いて多重比較を行った。その結果 A チームと B, I, K, O チーム, B チームと H, J チーム, C チーム K, O チーム, D チームと H チーム, E チームと K, O チーム, G チームと K, O チーム, H チームと I, K, O, Q チーム, J チームと K, O チーム, K チームと M チームの間に有意な差が見られた (表6)。

(4) 「部の雰囲気への満足」

適応感下位尺度の「部の雰囲気への満足」について、19チームそれぞれ比較をするため、それぞれのチームを独立変数、「部の雰囲気への満足」を従属変数として、分散分析を行った。その結果有意差が見られた ($F(18,304) = 7.896, p < .001$)。その後 Tukey HSD を用いて多重比較を行った。A チームと J チーム, B チームと C, G, J チーム, C チームと F, I, J チーム, D チームと J, M チーム, E チームと J チーム, F チーム

表4 適応感全体

要因	分散分析					多重比較検定
	df	F	**	η^2	P	
チーム	18	5.60	**	0.25	.00	B>C,H,J,M D>C,J F>C,J
誤差	304	(140.5)				D>A,C,H,J,M K>C,J,M O>C,H,J,M P>J Q>C,J R>J

**: $p < 0.01$,括弧内の数値は平均平方誤差を示す。

表5 「部活動に対する積極的行動」

要因	分散分析					多重比較検定
	df	F	**	η^2	P	
チーム	18	3.35	**	0.17	.00	G>C D>C K>C R>C
誤差	304	(44.8)				

**: $p < 0.01$,括弧内の数値は平均平方誤差を示す。

表6 「主将のリーダーシップへの満足」

要因	分散分析					多重比較検定
	df	F	**	η^2	P	
チーム	18	7.90	**	0.32	.00	A>J B>C,G,J D>J,M E>J F>C,J,M H>J D>C,J,M K>J,M L>J,M N>J O>J,M P>J Q>J,M R>J,M S>J
誤差	304	(13.7)				

**: $p < 0.01$,括弧内の数値は平均平方誤差を示す。

表7 「部の雰囲気への満足」

要因	分散分析				多重比較検定
	df	F	η^2	P	
チーム	18	5.16	**	0.23	.00
誤差	304	(19.5)			

**: $p < 0.01$,括弧内の数値は平均平方誤差を示す。

とJ, Mチーム, GチームとJチーム, HチームとJチーム, IチームとJ, Mチーム, JチームとK, L, N, O, P, Q, R, Sチーム, KチームとMチーム, LチームとMチーム, MチームとO, Q, Rチーム, NチームとJチームの間に有意差な差が見られた(表7)。

IV. 考察

1. 相関

部員数, 競技成績と適応感の間には相関が見られなかった。これらのことから, 適応感, 部員数や競技成績に関係がないことが明らかになった。部員数と適応感に相関が見られなかったことに関して, それぞれのチームが部員数によって組織づくりを工夫しており, 部員全員が適応できるようなチーム作りを心掛けているのではないかと考えられる, また競技成績と適応感に相関が見られなかったことに関して, 競技成績でなく, それぞれのチームの目標が達成できたかどうかに関係するのではないかと考えられる。

2. チームごとの「適応感全体」の平均得点の比較

本研究では, チームの平均得点が6段階評定の3.5以上の得点を適応ありとした。各チームの「適応感合計」の平均得点を見ると, Jチームを除くすべてのチームが66.5(すべての質問に6段階評定の3.5以上を答えている)を超えた。このことから, Jチームを除く18チームは, 適応があると言える。多重比較から, チームごとに差があり, 適応感の得点の高さに差があることが明らかになった。

3. チームごとの「部活動に対する積極的行動」の得点平均の比較

「部活動に対する積極的行動」において, すべてのチームが31.5(3.5以上を答えている)を超えており, 部活動に対する積極性があると言える。

分散分析から, チーム差があることが明らかになり, 多重比較からCチームのみ他チームとの差が見られた。これらのことから, 積極性はあるが, チームによって積極性の高さには差があることが明らかになった。これは大学で行うスポーツの場には, 競技性が強い「運動部活動」, 遊戯性が強い「スポーツサークル」の主に2つの場に分かれており, 競技志向の高い学生は運動部活動を選び所属するからであると考えられる。部活動や競技に対する積極性, うまくなりたい, 勝ちたいなどのモチベーションはどのチームにおいても積極性があると考えられる。

4. チームごとの「主将のリーダーシップに対する満足」の得点平均の比較

「主将のリーダーシップに対する満足」の平均得点は, すべてのチームが17.5(3.5以上を答えている)を超えており, 満足していることが明らかになった。また, 分散分析から多くのチームとの間に差が見られた。これらのことから主将に対して, 満足はしているがチームによって満足の高さには差があることが明らかになった。

5. チームごとの「部の雰囲気への満足」の得点平均の比較

「部の雰囲気への満足」の平均得点は, Jチームを除くすべてのチームが17.5(3.5以上を答えている)を超えており満足していることが明らかになった。また分散分析から多くのチームとの間に差が見られた。「部の雰囲気への満足」に関しては, Jチームは満足していない。適応感はあるが, 部の雰囲気には満足していないようなチームがあった。これらのことから満足しているが, チームごとに満足の高さに違いがあることが明らかになった, これらはチームの目標や環境, 文化などのさまざまな要因によってチームごとに変わると考えられる。

6. まとめ

適応感は部員数、競技成績と関係がないことが明らかになった。

また、大学女子運動部活動の適応感の傾向は、すべての大学は適応があったが、チームによって適応の高さが違うことが明らかになった。また、「部活動に対する積極的行動」は差があるチームが少なく、「主将のリーダーシップに対する満足」、「部の雰囲気への満足」は差があるチームが多かった。前者は内的要因、後者は外的要因が関係すると思われる。桂・中込⁹⁾の研究で明らかになっているように外的要因は適応感にとっても大きい影響を与えるとともに、本研究ではチームによってばらつきがある要因であることも明らかになった。

適応がある状態に、また適応感を高めるためには、外的要因である主将のリーダーシップ、チームビルディングの工夫をチームごととしていくことがとても重要である。例えば青竹¹⁹⁾は外的要因に主将のリーダーシップが大きく関わり、主将の人間関係を調節する行動が最も影響を与えること明らかにしている。また、他の研究から、ソーシャル・サポート²⁰⁾やコーチの接し方²¹⁾などが適応感に関係していることが明らかになっている。

V. 今後の課題

本研究や先行研究から、不安定な要因である外的要因をどのように高めていくのか、安定させるのが適応感を高める点で重要である。不安定である外的要因を安定させるために、学生自身が工夫できることとして主将のリーダーシップやチームビルディングが重要であるとともに、指導者の有無や大学からのサポートなど国や大学が環境を整えることも適応感を安定させるための一助になるのではないかと考えた。そのため各チームがどのような工夫しているのか、どのような環境で部活を行っていることを調べ、適応感との関係を調べることが必要である。また本研究では関東、東海の19チームのみの調査であり、今後多くの大学を調査することや男子も調査していくことで大学運動部活動の傾向を明らかにすることにつながる。さらに適応感を長期的に調査していくことも

必要であると考え。

注及び参考文献

注) 桂・中込⁹⁾、吉村^{16) 17) 18)}を参考にし、適応とは、個人と環境の相互作用の中で、環境からの要請に応えつつ、かつ環境に上手く働きかけて個人の要求も満たしながら活動し、現在、将来獲得する可能性を認めていることであることとした。そこで大学運動部活動においては、大学運動部活動という環境と個人が相互作用し、部活動に積極的に、満足して取り組むことができていることを適応感とする。

- 1) 公益財団法人日本体育協会：公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目Ⅲ. pp.40-43, 2010
- 2) 文部科学省：スポーツ基本法. 2011
- 3) 中澤篤史：運動部活動の戦後と現在. 青弓社, 15-19, 2018
- 4) スポーツ庁：運動部活動のあり方に関する総合的なガイドライン. 2018
- 5) スポーツ庁：一般社団法人大学スポーツ協会 (UNIVAS) 設立概要. 2018
- 6) 高田千恵子・田村宏・石淵真理子ら：部活動体験による青年期不適応について－事例検討－, 教育心理学学会第29回総会発表論文集, 528-29, 1987
- 7) 岡田有司：部活動へ所属している生徒としない生徒の学校適応 (2). 日本教育心理学会, 日本教育心理学学会総会発表論文集 50 (0), 312, 2008
- 8) 青木邦男：高校運動部員のスポーツ観とそれに関する要因. 体育学研究 48, 207-223, 2003
- 9) 桂和仁・中込四郎：運動部活動における適応感を規定する要因. 体育学研究 35, 173-185, 1990
- 11) 文部科学省：第2期スポーツ基本計画. pp.16-17, 2017
- 10) スポーツ庁：大学スポーツ振興に関する検討会議. 2017

- 11) 友添秀則：大学スポーツの価値をめぐって．現代スポーツ評論 36, 8-18, 2017
- 12) 滝口隆司：大学スポーツを「特殊化」させるな－教育と経営のはざまで－．現代スポーツ評論 36, 109-117, 2017
- 13) 山本順之：大学におけるスポーツの役割に関する研究－大学スポーツの変遷と発展－．九州国際大学社会文化研究所紀要 64, 81-99, 2009
- 14) 森正明：大学スポーツに関する研究－部活動から大学スポーツへ－．体育研究 52, 51-60, 2018
- 15) 岡本純也：大学部活動の現在．現代スポーツ評論 14, 36-46, 2006
- 16) 吉村斉：運動部活動における利己的表現と主将のリーダーシップの関係．心理学研究 75, 536-541, 2005
- 17) 吉村斉：運動部活動の適応感に対する部員諸対人行動と主将のリーダーシップの関係．教育心理学研究 53, 151-161, 2005
- 18) 吉村斉：部活動への適応感と競技特性の関係：運動部員の対人スキルと主将のリーダーシップに注目して．青年心理学研究 22, 45-56, 2010
- 19) 青竹悠里：大学運動部活動におけるリーダーシップの研究－リーダーシップと適応感の関係－．東京学芸大学卒業論文, 2017
- 20) 土屋裕睦・桂和仁・中込四郎：ソーシャル・サポートが大学運動選手の運動部活動に対する適応感形成に与える影響．筑波大学体育科学系紀要 18, 75-83, 1995
- 21) 伊藤豊彦・遠藤俊朗：コーチの社会的勢力と選手の適応感との関係．鳥根大学教育学部紀要．教育科学 27 (1), 37-44, 19